

富山親学フォーラム』

平成 15 年 12 月 6 日 13:30~17:30

富山電気ビル

ワークショップ

『学ぶことの喜びと大切さ』 16:00~17:30

鍵山秀三郎

(司会者) 「学ぶことの喜びと大切さ」というタイトルで鍵山先生のほうに、よろしくをお願いします。

(鍵山) みなさんこんにちは。今日は長時間に渡って話を聞いていただいて、その上私のつたない話を聞いていただくと言うことで恐縮でございます。こんな風邪の声で失礼でございますが、お許し下さい。今日は最初頂いた課題について、ぐっとつめさせていただいて、途中からは大変申し訳ないんですけど、今日の課題とはちょっと離れた、私の持論、信念について聞いていただきたいと思いますのでよろしく願いいたします。

まず今日の課題に沿ってお話をさせていただきますが、「学ぶことの喜びと大切さ」このことは先程ちょっと、会場でもみなさんにお伝えしましたけれども。私自身の人生を通して感じたことがございました。私が親から学んだこと、私が二人の子供に伝えたこと。このことを通して、学ぶことの喜びと大切さをお伝えさせていただきます。

昭和 8 年 8 月 18 日に生まれまして、19 年の 9 月の 20 日までですね、つまり 11 年間私は、東京に住んでおりまして、私が物心ついたときには、私の両親はもうかなり裕福な生活をしておりまして、二人とも岐阜県山奥から、貧農の出でございますから、東京に出て随分苦労したと聞いておりますが、それでも私が生まれた頃には既に余裕があったんですね。私がだんだん、物心がついてきた時、両親がですね掃除以外に仕事をしているという姿を、見たことがないんですね。いつも父は座って新聞を読んでいるか、何か本を読んでいるか。母は、徹底した掃除をしている。父も掃除はしていましたけれど。仕事をして稼いでいるという姿を見たことがない。そのために私は随分怠惰な、いい加減な少年になりましたね。学校の宿題なんて全部兄弟にやってもらいましたし、夏休みの絵日記なんていうのは、絵は兄が、文句は姉が言うのを私が渋々書くとね、そういうふうでしたし。工作は全部父が作ってくれて、私はただ学校へ持っていくだけ。そんな少年だったんです。子供心にもですね、私は大人になったら、どんな大人になっちゃうだろうと心配になりましたね。それが 19 年の 20 日に、学童疎開で山梨県に疎開をいたしまして、もうその行った先で一転してですね、何も無い本当に三度の食事が事欠くという、そういう生活に陥りまして。それでも私のところには、家族が月に 2 度東京から、手に上げられるだけ

持って、しょってきてくれましたからそれをみんなで分けて、食べるということがありました。それでも月に2度ですから知れたものでして、日常は本当に貧しい生活を強いられたわけです。その間に、私は視力を失って今日こんな、やっと車の免許が受かる程度の視力にまで落ちてしまいました。でその学童疎開から昭和20年の3月20日頃、約半年間山梨県にいて一旦東京に戻って、両親の郷里である岐阜県に疎開をいたしました。その疎開先で、両親がとんでもない労働をですねしているんですね、毎日。それはそれはもう平らな農地じゃない、山間地のこんなところですから、すべて背負うか担ぐか、天秤棒で持つか、いずれかなんです。一輪車も使えません。そういうところで農業を始めまして。もう目の前で両親が苦労している。でも最初それがわからない。私は夏の暑いときにちょうど12歳の誕生日を迎えた頃です、家で寝ころんで本を、少年クラブの古いのを読んでおりまして、何かの用事をふっと思い出して母を探しに行ったんです。炎天下、何も太陽を遮るものの無いところで、母が1人で山をですね線路工夫が使うような...あの重たいツルハシを使って開墾をしていたんですね、1人で。その姿を見たときに私は、もう放ってはおけない。このままで行ったら母は死んでしまうという、そういう恐怖感にかられて、その場から何の用事でいったのかも忘れて私は手伝うようになりました。最初は手伝いでしたけれども、いつの間にか手伝いの領域を越えて、大人も顔負けの仕事をするようになりまして、二宮金次郎ではありませんけども、近所の農家の方が「あそこの子供を見ろ」というくらい、私は熱心に仕事をするように...学校もですね授業が終わると、戦後すぐに野球がはやってですね、農家の子供もみんな野球をやって暗くならないと帰らない。でも私だけはですね、友達から誘われても何しても、何もかも振り切って約5キロ、山道を走るようにして家へ帰ったんです。ちょっとでも手伝うと、母親・父が喜ぶ。寡黙でしたから、言葉に出してありがとうとか、助かるなんていうことはいいませんでしたけど、その表情・態度から私は喜びを感じ取ったわけです。喜んでいるということがわかると、ますます私はのめり込んでいきましたね。そして父が、骨もまだ育っていないのにそんな重いものを担いだりしたら体がまがっちゃうとか、骨がゆがんでしまうと心配しましたけれども、そうやって心配をすればするほど私は、もっと少しでも重いものを私が持てば持ただけ、両親が楽ができるというふうに思って、ますます私は重いものを少しでも多く運ぶというふうになりました。その時、約10年間農業生活をやりまして、その時の跡がですね、ここにですね天秤棒を担いだ跡がですねタコとして残っておりまして。あれから50年以上経った今日でも、ここに天秤棒の跡が残って。私が洋服を作りに行ったとき、寸法を測る人が肩を触ると「ご主人、だいぶ肩が凝ってますね」とみんないうんですよ。いちいち説明するのが億劫なので「ああそうですか」と言っていますが、実は肩が凝っているのではない、私は肩こりなんか全くない。天秤棒のあとで。そのようにして、両親を少しでも喜ばせようという思いでやると少しも苦痛ではないですね。夏の暑いとき、専門の農家でも真夏...7月の末から8月いっぱいくらいは、お昼ご飯を食べると3時くらいまで、みんな日の射さない屋内の仕事をしたり昼寝をしたりしていましたけれども、私はその時でも1人

だけ田んぼに出てね...本当に1人ですよ。1人で田の草をとって、黙々ととり続ける。相当行ったり来たりして、相当来たつもりで立ち上がってみると、まだいくらも来ていないんですよ。1人でやる仕事は。それでも私はまた思い直して、家族が出てくるまでにですね、少しでもですね...ひと列でもよけいにとっておこうという思いに駆られていたと。そういう生活ですから。

勉強は予習も復習も、試験勉強もしたことがない。もともと勉強ができない。勉強をしなかったために、決して成績がいいとは言われない。授業中にあてられると、赤面するという。1人英語の先生でとても意地の悪い人がいましてね、私がそうやって仕事でできないということ、うすうす知っていながらわざと恥をかかせるかのように、私にあてる人がいました。本当にそのたびに私は、つらい思いをしましたがけれども、それでも私は両親の苦勞を少しでも和らげるためには、少くも自分が恥をかいたとか、恥ずかしいとかそんなことは言っておれないと。そういう少年時代をずっと過ごしてまいりました。

そこで田舎の高等学校を卒業して、一時期地元の中学の代用教員になりましたけども、そのなった先でちょうどその頃、日教組が非常に活動が盛んでございまして、私のような何にもわからない人間に、しつこく言われることが嫌で本当は天職としていい、自分に合うと思いましたがけれども、辞めて再び東京に20歳の時...昭和28年でございます。ついで先でデトロイト商会という会社にお世話になりました。住み込みで。とにかく住み込みでなければ、生きて行かれませんのでね。いくら給料をくれるのも、何の仕事をするのも、条件がどうなる何もない。とにかく、今日から入れてくれますか？入れてやるけど3年間は1日も休みがない。文句があったらその場で出て行けという。その2つの条件を私は頂いてお世話になる。1日も休むなと言うと、土曜、日曜日・祭日以外休むなというふうに、みんな思うんですけど、そうじゃない。1年365日、1日も休みがない。正月も元日から、朝も6時から。社長の機嫌がよければ、夜12時前に終わるといふ。あるいは、社長がどこか遊びに行きたいときは12時前にお店を閉める、という会社でございましたね。先輩からずいぶん後ろから蹴飛ばされたり、自動車の工具をぶつけられたりそんな思いをいたしました。でも私は1回として、家に辛いとか苦しいとか、大変だという手紙を書いた時がありません。書く時は、本当は手紙を書きながら、今日でも辞めたいと思いつつながらですね、本当に会社にお世話になっている、先輩がいい人ですね、田舎で百姓をしているよりよほど楽だなんて書いてですね、それで投函しちゃうんですね。そうするとそんな手紙を出した以上はまさか、あくる日辞めるというわけにはいかないんで、もう一週間我慢しようかなというような、そういうような社会出発をいたしました。ずっと通して親を喜ばせようという気持ちが、どれほど私にエネルギーを与えてくれたか。人を喜ばせようということが、どれだけ自分の生きるエネルギーをわき立たせるものかということ、子供ながら知ったわけでございます。

そして、更に両親からは先程もちょっと、お話をしましたように、私が歯を食いしばって歯がガタガタになるほど天秤棒で重いものを担ぐ。しかもそれが、段差があって田んぼと

田んぼの間が少ない、段差が少ないところでも大人の背くらい...それでも少ないほうで。普通はもっと一枚一枚が段がある。山であるから傾斜がある。そこを冬になるとモミを作って、冬の間下肥、つまり人糞を担いでいっていってかける。朝早いときはまだ凍ってコチコチですからいいんです。少し日が出てきて下がジワッと柔らかくなる。照ってくると滑るんです。私は2度担いでる途中で落っこちて、頭から全部かぶったことがあります。でもそのとき、汚いと思わないんですね。これが流れていったら大変だ。今みたいに化学肥料も何にもない。そこに私の家ような疎開者には、化学肥料の配給もない。全て自然の肥料しかないわけで。これが流れていったら大変。手で田んぼの畑のほうに押しやって、それを止めてから私は、氷の張っている川に入って全身を洗って、それできれいに帰ってということが2度ありました。そのほかにいろんな体験がありました。しかし、私がどれだけ重いものを持ったとか、どれだけたくさん運んだということではない。私が一点集中して物事に真剣に取り組んでいるという姿に、親が喜んでいたら私は思いますね。子供のやることですから、自分では一人前にやったつもりであっても、やっぱり大人からすれば少ないですよ。それでも私がそのことに集中して、真剣に子供ながら取り組むという姿を親がとても喜んでくれていたように思います。

そこで、先程申し上げましたように20歳の時に、再び東京に出て新橋の会社に...そこでさんざんな目にあいましたね。しかしそこでも私は両親に心配をかけないようにという一念に置いて、本当はもう今月いっぱい我慢したら辞めよう、今週で辞めようとかですね。先輩から陰湿ないじめを受けるし。特に私が辛かったことは、住み込みですからみんな食事が一緒なんですね。一番の新人の私が食べにいった頃には何も残っていない。お釜のそこにご飯粒がへばりついているというね。みそ汁が鍋のそこに少し、これですくって、すくえなかった分が残っている。そういう目に遭うわけです。私は少年時代体を鍛えてますから労働はなんともないんですけど、お腹がすいてしょうがない。一人前食べたってお腹がすくの。そんな中で私は、人に意地悪をするというのはどれだけその人間を痛めつけるものであるかということを知りましたので、私は絶対です人になんかそういう行為をさせるようなことはしないという人生を、歩こうと思いました。その会社で8年間お世話になりました。その時に先輩は長年つとめた人ですから、知識もある技能もある、私がいままでまごまごしていることを、あっという間にやってしまう。すばらしい技能も知識も持っていました。しかし、その時に学んだのがここに書いてある、これは孔子の言葉で「生は
」これはどういう事かという、生まれたときの能力はほとんど変わらないという。次にアイトウシ。後から学んだこと、身につけたことはそうとうが伴うということ。ということを知り、孔子が。人間は生まれたときの能力、子供の時の能力は時の能力は、神童といわれる子供であっても、バカだっていわれる子供でもそう大して変わらないんですね。ところが年々いろんな事を学び、身につけていくにしたがって、ならいはどんどん身につけていく人と、しない人との差はどんどん開いていく一方ですね。というふうに孔子はいいました。私は、その学校の勉強もしていませんし、論理的に学んだりすることはでき

ないけども、体験・自分の実践を通してなら学んでいくことができるというふうに徹してきました。そしてもう一つは、難しいことはできない。もともと手は不器用ですし、ご覧のようにもう 70 にもなって字もたいした字も書けない。前に私がちょっと標語を書いて玄関に貼っておいたら、来た人が「だいぶん字が上手になりましたね」前に来た人は子供が書いたと思ったんですね。子供をほめたつもりでいったんですね。その程度なんですね。でも私は実践に裏打ちされた、体験に裏付けされた人生を歩んでいこう。これなら絶対に劣ることはないと信じて、通してまいりました。先程高橋先生が演壇からご紹介いただきました「凡事徹底」というのは昔からある言葉ではありますが、実は既に死語として埋もれていた。それを私が「凡事徹底」ということを表題にして、私の人生は「凡事徹底」ということで貫いてまいりました。よく人から「凡事徹底」ってどういう意味ですかと、昔はよく聞かれました。しかし最近はやっと、「凡事徹底」という言葉が浸透してまいりまして、私会ったとたんに「凡事徹底」私もやっていますとおっしゃるんですけども。その方の行動をみていると「万事手抜き」ということも少なくないです。「凡事徹底」というのは、そう簡単にできることではないんですね。

どういう意味を持っているか。「凡事徹底」というのは全てに渡って行き届いているということが、第 1 番の条件でございます。例えばお店であれば、大体この頃お店が汚くなっているというお店は少ないですね。大体どこのお店へ行ってもきれいになりました。ところがちょっと裏へ入ってみると、飲食店であれば厨房が汚かったり、倉庫が汚かったり、駐車場がゴミだらけだったり。フェンスに草がはえてからまっていたりというお店は少なくはない。それではだめで、お店だけではなく倉庫も、事務所も駐車場も、あるいはその店の周辺もきれいになっている。全てに渡って行き届いているということが「凡事徹底」の第一条件でございます。第二条件はなにか。唱えている主義と行動とが一致しているということが第二条件でございます。これもとても難しいです。今経済界でも私が赤面するほど立派なことをいう人は多いです。人の前で、自分の行動の動機は善なりなんていってる人も、社員を痛めつけている。仕入れ先を痛めつけて、さんざんな事をしている人もおります。いろんな会社の利益のためにはもう、仕入れ先が潰れようが何しようがおかまいなし。過酷な条件を突きつけて自殺したりというケースが少なくない。それは私から見ると、言っていることとやっていることが一致していない。本当は一致はできません、一致するとしたら、お釈迦様やキリストのような方だと。なるべく言っていることとやっていることが、重なっている部分が多い人のことを...それが主義と行動が一致しているというふうに言っているわけです。最近ばかりうじて、くっついていてという人、中にはこういう人もいますね。まったく離れちゃってる。ほんとにいるんですよ。ものすごい立派なお釈迦様が顔負けするような立派なことを言っていて、実際にとってる行動は自分中心の行動をとっているという人も少なくはない。それではだめで、「凡事徹底」というのは主義と行動がなるべく近づける努力をしているという人。それからもう一つ付け加えれば、そのことが、寝ても覚めても忘れられないくらい、熱中して取り組んでいると言うことが、

。ですから私はまだ、この重なっている部分の人様に言えるほど多くはないんです。しかし昔はこんなだった。少年時代はこんなだったのにこうなり、少しずつ重なりつつある。あと何年私が生かさせてもらえるかわかりませんが、生きてる限りは私はそのことを続けていきたいと思っております。

更に4番目の学業と生活環境というのを同一にしています。今ですね、学業はかなり日本は進んでまいりました。私孫が勉強している教科書を見ましても、今中学生なんですけど、昔高等学校でやっていたような勉強をしています。小学生で「順列と組み合わせ」なんて、「順列と組み合わせ」なんてわたし達は、高等学校で習ったことではないかな。かなり難しいことを、小さいのにやっている。しかし生活感覚はない。生活感覚に欠けてきていると思います。私の会社にも毎年、学校を卒業して入ってきますけど、返事もできない。名前を呼ばれても返事もできない、生活感覚の欠如ですね。電話が鳴っていても自分の机の上の電話じゃなきゃ、隣の机の電話が鳴っていても隣にいらなくても、平気で知らん顔をしている。悪気はないんですけど。これはすべて生活感覚の欠如からきているものでございます。みなさんも経験していると思います。扉を開けて前の人が出ていったすぐ出ていこうとすると、前の人パッとはなしてドンとか。閉まるとかはよくあることだと思います。それも生活感覚の欠如でございますね。そんなことはどうでもいいと思うけど、人生を左右するくらい生活感覚というものは、大事なものでございます。聖書の中に、こういう言葉が出てきます。「汝の行動は、汝の予言者」まさに本当に人間の人生とはこういうものだ。どんな行動をとろうとその人の勝手ではありますが、その人が今現在とって行動そのものが、その人の将来を予見していくということですね。去年私は、北京から帰ってくる時に、飛行機の席が...いつも私はエコノミーしか使わないんですけど。ファーストクラスしか席がないということで、乗りました。そしたらちょうど、日中友好30周年の式典があって。その帰りの政府の要人がみんな、ファーストクラスに乗っていた。私の前の席に、九州で今度落選をした大物が、名前は言いませんけども。私の前の席に、私は通路側で、その通路を隔てた向こう側が、大島農林水産大臣ですね。そのほかに名前は知りませんが、しょっちゅうテレビで顔を見る人たちが、みんな私以外は、そういう人たちが占めている。なんとこの人達の行動が傍若無人で傲慢で。読んだ新聞は足下に投げ捨てるし、借りた毛布は靴で踏んで。ひどい状態。汝の行動は汝の予言者なんです。ですから、やはりわたし達は、行動を慎んでいかなければならないと思うんですね。その行動の元になるのは生活感覚で。どういう事をしたら人が嫌がるか、どういう事をしたら人が迷惑をするかという事がきちっと、つかみ取らなければならない。あるいは人の表情一つで、「あ、今自分は何か不愉快なことを言ったかな」、「何か悪いことを言ったかな」ということにまで思いが至らない。相手がどんな顔をしていても平気で、いろんな行動をとったり

ということがあったりするわけでございまして。そういったことをいちいち考えなくても、自然に読みとることができるのが生活感覚というものを身につけているということ。学業も大事です。学問はおろそかにしてはいけません。私はこの年になったって自分

では難解で難しいと思う本にでも取り組むようにしているんです。ある時長野県のある山の中の、森信三先生という方が行ったとき山の中の小学校の先生達がカントの本を題材にして勉強会をしていた。そこで森信三先生が「なぜこんな難しい本を読むのか」というふうに言ったら、「田舎にいるからといって卑しくはなりたくはありません。」つい田舎にいると何も勉強しなくても通ってしまう。そうはなりたくない。と言ってわたし達はあえて難しい本に取り組んでいるという答えが返ってきた。信三先生が大変感心したと言うことを、本に書いてらっしゃいます。私もこの年になると頭にも入らない。さっきよんだ定理はまた、忘れちゃってまた元に戻って読み返すなんてことがありますけど、それでも、

取り組むことはやめないようにしています。最後5番目にあげてありますのは、あげる幸せということですね。これは3つあります。大体の意味はおわかりになると思いますけど、子供が生まれたときお母さんに抱っこしてもらい、お乳をもらうおしめを取り替えてもらう、お風呂に入れてもらう。泣けば何かしてもらえると喜び、幸せです。次は今まで乗れなかった自転車に乗れるようになった、逆上がりができるようになった。というふうに今までできなかったことができるようになる 幸せ。3番目は人に親切にして、ということによって人が喜ぶことを自分の喜びとする幸せ。これが最も人間にとって大切な喜びでございます。ところが残念ながら世の中の中には、いつまでも、いくつになっても赤ん坊のまんまでもらう幸せしか知らない人もおりますし。せめてできる幸せまでで止まっている人も少なくはないですね。一方子供でも、早くもあげる幸せまで到達している子供も少なくありません。山形県宇部市に村上テルアキ君という、今小学校6年生の子供がおりまして、この子供さんがいつもお母さんと学校の掃除の会に出てくるんですね。本当に感心です。ついこの間鹿児島県指宿のとなりには、頼娃(エイ)町という町がありまして、この町の頼娃高等学校という学校の掃除をしたときにこの村上君は、お母さんと一緒に来ました。私が1時間半ほど話をさせていただいて終わったときに、みなさんが会場を出てこれから懇親会場へ移ろうというときに、「おじさんこの椅子は片づけなくてもいいでしょうか。」と。「誰かが片づけるんじゃないんですか」と。大人がみんな懇親会場に心がいっちゃって、早く懇親会場に行こうとしているのに、その時小学校6年生の村上君が、この椅子は誰かが片づけなきゃいけないんじゃないか。言って声をかけたんですね。ああそうだ、こんなにたくさんのおいすを、何人かでやったら大変だ。みんなで作れば今すぐやれるからやろう、と行って片づけた。そのような考えをあげる幸せと。

この子供でもあげる幸せに至る子供もいれば、大人になっても、もらう幸せのまんまで人生を終わってしまう人も少なくはない。どれがいいか。人間は早くあげる幸せというものを知って、1人でも幸せにすることが自分の喜びであると。こういう風になりたいと。これ今日いただいた課題に対する、ことごとくでございます。

あともう少し、時間があるようなのでこれから私が日頃考えていることについて、日本人は素晴らしい知恵、思いやりの心をもっておりまして、世界から称賛される民族であるということ、たしか1549年8月15日フランシスコ・ザビエルが先程の薩摩半島の頼娃町

のそばにある山川港に上陸をいたしました。今から 450 年も前の薩摩半島なんて言えば、貧しさの極みだったと思いますね。その漁村に上陸をしたときにフランシスコ・ザビエルがとても感心しました。なんとこの国の国民は、貧しい衣装を恥とせず、礼節や礼儀を重んじて、すばらしい民族である。自分は世界を旅してきてこれほど優れた民族を見たことがないと書いて。さらにこの民族に戦争をしかけたり、征服をしてはならない。そんなことをすれば、人類の損失になるとまで書いてインドの 教会本部に送ってありまして、その手紙が今でも保存されていると私は知らされました。すごいことですね、薩摩半島の突端の方と言えば貧しいなんて言うものではない。当時の薩摩藩というのは過酷な税をとる、そういう藩でございましたから、農民漁民というのはほとんど食うや食わずの生活をしていたと思います。ほとんどすべてが税として取り上げてしまう。そういう時代でございました。にもかかわらず、その貧しさを恥としていない。すばらしい民族だと書いてある。それほど優れた資質を日本人は持っている。知恵も持っていました。知恵のおかげで貧しい、辛い苦しい生活を和らげて生き抜いてきた。どんな知恵か。自分の苦しさ悲しさというものを和らげて、小さくする知恵だったんですね。どうやるのか、実に簡単なことでもございまして、自分よりもっと苦しんでいる人に親切にすること。たったそれだけのことで、自分の苦しみやつらさというものが和らぐ。そして小さくなるんです。それが今はどうですか。反対のことをしますね、自分が苦しいと自分より弱い人に向かって憂さ晴らしをするというとんでもないことをして、自分の苦しさを紛らわそうとするんですが、反対のことをやっていますから、ますます自分の苦しさ・辛さというものは膨張して大きくなって、強くなっていきます。反対のことです。東京から大阪へ行こうとしているのに、東北新幹線に乗っているようなものでございまして、東北新幹線の中でいくらはちまき締めて駆けたって、大阪へ来ることはできないんですね。それよりも、鈍行列車あっても歩いてでも、自転車でもいいから西に向かって進むという事が大阪に近づくことでもございまして。それを反対の事をやっているが為に自分の望んでいることから、どんどん遠ざかってしまっている。そしてそれがますます自分の苛立ちというものを呼んでいるんですね、何か違うな、しかしそれがわからないがゆえに、ますます心がすさんでいくというのが今の日本の現状でございましてね。私にはそのことで思い当たることがある。私が疎開をしていたとき、本当に日常でも私の家族は冬になりますと、地面に埋めておいたサツマイモもですね、腐っちゃって中に黒く筋が入って、苦くて臭いんです。それでも食べずにおれない。わずかなお米に傷んだサツマイモをさいの目に切って入れて、そのご飯炊くわけです。もうお釜のふたを取ったとたんサツマイモが傷んだにおいが、ぷーんとしてくるといふ、そういう生活でしたね。

そんな中でも、私の両親は年に何回かはどこかから、餅米と小豆を調達してきて、そしてサツマイモで作った ですね。サツマイモをゆでておいとくと、餡がたれてくる。それに麦芽を入れると甘くなるんです。それで味を付けて小豆のあんこを作って餅を用意して、もともとそんな大した量じゃない。わたし達が食べて少し残るくらいの量です。残

ったものをもってあれば、明日もまた食べられるんですけども、私の両親が4キロほど離れた炭坑の、実に気の毒な家族に半分くらい持って行ってやる。あれがあれば明日ももう一度食べられるのに。子供ですから思いますね。その家族はどういう家族かというと、私がいた地域の炭坑は、九州やなんかの炭坑と違って、炭層がこのくらいしかない。石炭だけ掘っていきますから、こんなになって掘る人は掘る。掘った石炭を出すときは子供がいいわけです。子供が入って行って、こんなかごに石炭を積んで肩に縄をかけて、這って奥から運んでくるわけです。親子組でやっている。小学校3年生か4年生の女の子です。泥だらけになって、もちろん学校へ行っていない。私の父はそれを知ってしまって、放ってはおけない。家も食べる物がないけど、あの家族はもっと悲惨であるということで、日頃でも何かあると持っていったりして、おもちをつくって半分くらい持っていっちゃう。それが、その時はわかりませんでしたけど、後から考えれば自分よりもっと苦しんでいる人に親切にすることが、自分の心を癒して、この苦しみ・悲しみ・辛さというものを和らげていくものである。それを私の父は、小学校も4年しか行っていないと言いました、学はなかったですけども、本能的にそういうものを知っていたんだと私は思います。

ということで、ここでみなさん方に改めて申しあげることが、今の人間は生きていてだけで、辛い苦しいことがたくさんありまして。毎日が愉快でしようがないって言う人はいないんです。端から見れば楽そうに見える人だって、必ずいろんな苦しみ、困難なものを抱えている。しかしその困難を、憂さ晴らしをすることによってなくそうなんていう考えは、これは全く反対の
である。むしろもっと困っている人を助けていく。これがとても大切な生き方であると私は思っています。

さて、本論の掃除の話になりますけど、もともと私の両親が掃除をよく子供の頃、1日に何度も玄関の格子戸なんか、何度も洗って拭いてってやるものですから、えぐれちゃってるんですね。本来四角かったものが、こんなふうになって。そんな家でした。ですから掃除そのものは、家全体の習慣に身に付いておりました。特に私が掃除に力を入れ始めたのは、昭和36年10月に、今の事業を自転車一台の行商から始めた時からであります。最初は私1人の行商でございました。そのうちに2人3人と
来るようになりましたね。ところがちょうど、日本は高度成長期に入り始めましたから、学校を卒業したての人なんて誰もこないです。学校なんか行こうものなら来るところを間違っただんじゃないか、と言われ。なんでそんな、吹けば飛ぶような会社に人を...こんな会社が来てるんだと名刺を百人一首みたいに名刺を並べて、見さしてもらって。みんな第1部上場会社ですね。れっきとした会社がみんな来て、就職課の先生に挨拶をして。私のような会社には目もくれない。それでも、いろんな縁で来る人たちは、みんな方々を転々と渡り歩いた人たちばかり。みんな、心がすさみきって、険しい顔をして。目も鋭いし。本当ならこういう人は入ってもらいたくないと言う人ばかりです。でも断るということはできない。誰であっても来たら入ってもらおう。この人達の心をどうやって穏やかにするか。人間の心を取り戻してもらいたい。そういう願いを持ったんですけど、私は今のように言葉で説得をしたりすることは

できなかったんですね。そこで職場環境を徹底的にきれいにして、社員を変えようと言うのが私の掃除にのめり込んでいく、大原動力になりました。朝今のこんな時期はいつも真っ暗である、会社に行った時は、真っ暗な時にまず中のトイレ掃除をしたり。事務所の中をしたり。少し薄明るくなってくると、周りの掃除をしたりあるいは車を洗ったりしてみんなを待つわけです。私は自転車の行商をしていましたけど、社員に自転車の行商なんて言ったらだれも来ませんので、中古車ながら車を買って使ってもらおうと、汚くして戻してくる。私が洗っておくとまた汚しておいてある。時にはどこかぶつけてきてへこんでたり、かすったり。だんだん汚くなる。これを本当は洗ってもらいたいけど、車を洗えななんて言ったら明日から来ないんですね。そんな事ばかりでしたから。年中退職願というのを持ってましてね、気に入らなきゃ。そんなんでも出す人はいいほうで、黙ってこなくなっちゃう。朝来てたけど昼からいなくなっちゃうとか。会社の車に乗って行ってよ所に置きっぱなしにして辞めちゃった。警察からおまへのところの車がとんでもないところに置いてあるから、取りに来い。と言われて取りに行ったとか。そんなことが日常茶飯事のように、暗澹たる気持ちになる。私はどう考えても職場環境をきれいにするという以上に、いいと思うことが私には思いつかなかった。だからこれをやり続けた。*****聞き取れません*****

なりました。やっぱりやり続けるというのは偉大な力を持っている。20年たったら、ほとんどの人がやるようになりまして。恐るべき力。30年たったら外から掃除のやり方を教えてほしいとって来るようになりまして。30年にして歴史になる。50年、これは中国の言葉です。ただ残念ながら出典がわかりません。誰の言葉かということがわからないんですね。いろいろ調べましたけど、とうとうわからないまま今日に至りました。私は10年偉大なり。20年恐るべし。30年にして歴史なり。というのは本当だと今思っております。皆様方にも自信を持ってこれは本当だと、いうことをお伝えすることができます。ただやればいいというものではない。心を込めてやらなくてはいいけません。一点集中で心をこめてやろうとすると、30年にしてひとつの歴史ともいえる。これはまだ皆さんにお約束はできません。まだ経験をしておりませんので。まだこの中間点。40年たったところですね。ですから、皆さんになぜお約束ができないかということ、ここに来る手前で、私が仏様になっちゃうかもしれない。だからね間違いなくこうだということはいえない。でも30年までは間違いはない。恐るべき力になりうる、ひとつの歴史とも言える出来事になったということは、お約束ができますね。ですからどうか、皆さん方もこれだと自分が信じたことは、やめない・あきらめない。先ほどもお話が出ましたね。あせらず・あてにせず・あきらめずという、3つのAが出ましたけども。まさにこの領域でですね、やり続けて頂きたいと思うんですね。

私は今70歳。しかも少年時代から過酷な労働もしておりますし、操業してからずいぶん長い間、ろくなものを食べずに全国を夜も寝ないで、文字通り寝ないで駆け回ってきましてから、決して体が上々だとは言えない。それでもこれから何年か、生きる間この考えを貫

いていこうと。そして皆さん方に間違いありませんよと言えるようにしたいと思っております。

このようにして続けてきた、掃除でございます。最初の頃は、いぶん人から無視されたり、嘲笑されたり冷たい目で見られたり、いろんな経験をしてまいりました。それは目で見られるだけでない。面と向かって随分言われましたね。銀行さんからも、社長がそんな朝から早く来てトイレの掃除したり、車を洗っているようじゃ会社は将来見込みがないですよと言われたし。仕入先からもそういう風に言われましたし。社員からも言われましたし。どっちを向いても四面楚歌というのはこういうことでございました。しかしさっきお話したように私は、あきらめることはなかった。そしてやり続けてきてみたら、今、今日のように掃除というものが大きな力を持っているということ、たくさんの方々に理解をしていただけるようになったわけでございます。

この掃除をすることによって、何がわかってくるか。だいたいごみを捨てる人というのは、掃除をしないひとですから、タバコの吸殻を捨てたりごみを捨てたりする人、あるいは方々汚したりする人は、掃除をしない人たちです。そういう人はどういう人かという、掃除をする人の苦勞がわからない。自分がしてませんから。人がやる苦勞がわからない。それから今ここに落ちている、自分の投げたごみ、きれい好きな人がこのごみを見たときに、どんな気持ちになるかもわからない。自分はごみを見ても汚いと思わないわけですから、それをいやだと思ってみる人の心がわからない。そういった人たちがごみをたくさん捨てるわけです。そして私が掃いても掃いても、朝ずっと掃いていって戻ってくるともうタバコの吸殻が落ちているというのは毎日ですね。私が掃いているそばで、いま掃いていた所で、バス停で、目の前で平気でタバコを捨てるような人も。それでも私はやめない。そういう話をしましたら、熊本県の長洲町というところで質問がありました。そんなごみなんか少々ひろったって、捨てる人が多いから無駄じゃないかとそういうお話でした。そこで私は、ひとつ拾えばひとつだけきれいになりますよ。それが私どものグループの方々の標語になっておりまして、Tシャツに印刷して着ている地域もあります。ですからひとつでも拾えばひとつでもきれいになることは、間違いありません。そして拾う人が一人でも増える度に、それが2つになり3つになり、100になり1000になる。と私は確信をしているんです。中国の大学に掃除にいったとき、やっぱり大学生からそういう質問がありました。私は大学に来て勉強をしているのは、大きいことをやるために大学にきて勉強をしている。トイレ掃除のような小さいことをやっていたら、大きいことができないんじゃないかと。こういう質問だったんですね。私は、あなた方、大勢人の見ている前で空き缶一個、タバコの吸殻一個拾えますかって聞いたんです。拾えないって言いました。手を見せてくださいと。180センチくらいある、実に堂々たる青年で。あなたそんな立派な手があってどうして拾えないんだといったら、恥ずかしいと。そうでしょう、タバコの吸殻一個、空き缶空き瓶一個拾うということは、実に小さく見えるけども、広い心・強い心がないとそれはできませんよ。あなたは体は大きいけど、私より心は弱いし、心が狭い。人間はいろいろ学ぶこ

とも大事だけでも、広い心・強い心を持つことが大事です。このタバコの吸殻・空き瓶・空き缶があなたの心を強くしてくれる。こんなただで月謝も要らなくてできる、いいことをあなたはなぜやらないのかという風に言って、後でその青年がいたく感動して、この学校の中でトイレ掃除をするクラブを作りますとって、今その学校にトイレ・クリーンクラブというクラブを作って、掃除をしている。あまり感心なんでその青年、トウさんと言うんですけど、もう一人二人友達連れで、日本へ招待しましょうって約束しちゃったんです。そしたら大学の先生が、私もついてきたい。さらにその掃除の会の世話人の人が、男子学生だけでは片手落ちである、女子学生も2人呼ばなきゃいかん。私は2人の考えで予算を組んでたのが、5人になっちゃって出費がいやでも増えちゃった。しかも私は青年2人掃除の取り組み姿勢で選んだのに、女子学生を選んだ人は容姿で選んだ。でも5人呼びました。12日間日本にいて方々見学して帰って行って。私はずっとついて回ることはできませんでしたが、最後に広島空港から5人が帰ったと。見送っていった人たちに、泣いて抱きついてお礼を言って帰ったと聞きました。日本がODAで何千億ものお金を出して、それでも悪口を言われる。それよりもこういう民間外交でお互いに芯から心を通い合わせるの方が大事ではないかと、つくづく思ったんですね。ついこの間も広島の暴走族の少年少女8人。つきそいが5人、13人。私は　　に送りました。これは暴走を繰り返していた少年少女。その8人の中には元暴走族の総長もふくまれております。彼らが更生を誓ってこれからはもう、絶対にしない。自分たちの後の人間にも脱退することを勧めるという約束の元に、8人プラス5人の付き添いを入れて13人ロス・アンゼルスに送り、この8人も最後の夜に、ついてきた5人のついてきた人たちの部屋を回って、泣いてお礼を言ったといえますね。本当にうれしい。暴走族の少年少女にも泣いて喜ぶ心があるんです。それをみんなつぶしてきたのは、大人ではないか。なぜ大人ではないかと私が断言するか。今から4年前に暴走族の少年少女22人、広島のアリスガーデンという公園に集めてトイレ掃除をしたとき、最初は抵抗していた少年たちが一生懸命やりました。終わったとき、少年の一人が独り言を言いました。こんな大人もいるんだなあ。その一言で、いかに少年少女たちが大人たちを、信用していないか。大人はずるい、何をするかわからないという目で見ています。ところが、こんな汚いトイレをですわ自分たちと一緒に肩を並べて、その掃除をする大人もいたんだということを見つけて、そしてこんな大人もいたんだなあ。独り言を言った。そこで私たちは少年たちと一緒に、彼ら書いた落書きを消したり、人が吐いたチューインガムをはがして歩いたり、側溝のふたを開けて中のごみをさらえたり、トイレ掃除をしたりする活動をずっと続けてまいりました。ひとつひつは小さなことですが、小さなことが実に大きな力を備えているということ、私はつくづく思うんです。みんな誰も大きなことやらないとだめだと思って錯覚をしているんですけど、大きなことなんか最初から取り組んで続いたためしがない。いずれも小さく取り組んで、それを大きく育てていくというんですね。それこそ成功への道であると思います。どうか皆さん方におかれまして、今日は・・・ちょっと石倉さん立ってください。滑川

市で掃除の会を立ち上げて、ずっと続けていらっしゃる石倉さんです。それから富山県では小矢部で掃除をずっと続けている、グループもあります。ですからどうかそういう方々、あそこに片山さん、立ってください。この片山さんは砺波ですよね。福井から富山県内じゃない、大阪も京都も名古屋もですね、いつ仕事してんのかなと思うくらい、社員の方に聞くといない方が多いという、そのくらい熱心に、自分の費用も時間も費やして、この運動に携わっているんですね。そういう方々のおかげで、日本中にこの運動が広まりました。もう時間がなくなりました。最後に五小節の詩をご紹介します。終わりにします。

だまされて良くなり、悪くなってしまうてはだめだ。

いじめられて強くなり、いじめてしまてはだめだ。

踏まれて立ち上がり、倒れてしまてはだめだ。

いつも心は燃えていよう、消えてしまてはだめだ。

いつも瞳は澄んでいよう、濁ってしまてはだめだ。

という五小節でございます。どうかいつも心が燃えて、いつも瞳が澄んでいるような、そういう人生を送っていただきたいと。

今日はつたない話を最後まで聞いていただいてありがとうございます。

(司会) 鍵山先生どうもありがとうございました。それではせっかくでございますから、質疑応答を。 のほう、

本日は皆さんありがとうございました。

(鍵山) 最後に申し上げました詩は、時間がないんで早口で申し上げまして、もしよろしければ、浦山理事長のほうに私がファクシミリしておきますから、ご希望の方はお尋ねになってください。よろしく願います。

(司会者) それでは皆様、大変長時間にわたりましてご参加いただきまして、ありがとうございました。お渡ししました中にアンケートが入っております。お手数かと思えますけども、どうぞご記入いただきましてアンケートのはお席のほうに、置いていただければ幸いです。また今日お渡ししておりました名札のほうも一緒に、お席の方においてお帰りいただければ幸いに存じます。それでは今日は本当に、お足元の悪い中フォーラムのほうに参加いただきましてありがとうございました。気をつけてお帰りいただきますように。